

『電気之友』誌にみる九州の電気事業（II）

東定, 宣昌
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/13560>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 2, pp.28-31, 1973-12-10. エネルギー史研究会
バージョン：
権利関係：

『電気之友』誌にみる九州の電気事業(Ⅱ)

東 定 宣 昌

前号に引続き『電気之友』誌より九州の電気事業に関する記事を抜粋した。今回は明治三十年、一年間の記事である。これによると火力発電による都市電灯会社が急速に小都市へ波及せんとする一方で、二十年代後半より始まる水力開発計画が、熊本県、佐賀県の山間部において多数みられる。また初期の自家発電の状況がよりうかがえる。とりわけ三池炭坑の電力利用開始期に関する第六六号、第七一号の記事はやや詳細で興味深いものがある。

○三池炭礦通信(一月十五日電友報)

三池炭山にて此度第二電灯拡張工事を始め二相交流発電機一台、六十「キロワット」、百二十馬力タンデム、コムバウンド汽機一台増設他に電力使用の依頼も致し直ちに認可に相成り即ち坑内悪水排出用試験的に三十馬力セントフュガル電気ポンプ二台据付一分間に水量八十立方呎揚水百呎揚得る力なり四月頃には準備出来候と存候電灯数も現今三十「キロワット」交流発電機に対し取付数七百灯に相成り之れに増灯致し千三百灯にて内アーク灯六個使用其他電話交換器廿八分一台且停車場間には別に電話器を用ひ又坑内にも同様、坑内にエンドレス、ロープの通り合図用電鈴を使用し其距離十町余其他電気を応用致し岩石等を破裂せしむる電気装置も有之其他種々応用の事業研究中なり前述の電気ポンプ試験好結果に御座候はゞ宮の原坑は一大発電所とし坑内使用の分悉皆変更の見込、開鑿の万田坑にも電気応用の筈又三池紡績会社も

第一工場の時代は一万鍾数に有之其後二万鍾増設又本年三月頃迄には三万鍾数に相成り現今はエヂソン六百灯用発電機一台取付灯数六百十六灯此度第三工場増設に付ては灯数四百二三拾灯増設依て此度はエヂソン六百灯用を買入三線式に改め工事を為す筈なり三池炭礦は三井家の事業なれば実に有望の事業に御座候
(第六六号 明治三十年一月 四十頁)

○博多電灯株式会社 にては市内に於ける当初点灯の見込は二千灯にして百二十馬力の気錐二台を使用する計画なりしも目下点灯申込高は二千三百余灯に及び尚ほ続々申込ある由
(第六六号 明治三十年一月 四八頁)

○博多絹綿紡績の電灯 同社にては線糸場紡績工場及事務室其他自家所用の個所に電灯架設の義を出願せりと
(第六八号 明治三十年三月 一五三頁)

○熊本電灯会社の移転 今回飽託郡本山村に移転拡張する事に決す其設計は現在の千三百余灯に更に百二十灯を増加し千五百灯にする筈にて今回移転の費用は六萬円を要する予算なりと
(第六九号 明治三十年四月 二二六頁)

○小倉電灯会社 同社は発電所を字馬借に設置し党灯マツは概略一千灯

の予算なるが爾後小倉の膨張に随ひ増灯を要する場合及非常其他の準備の爲め二千灯位の発電機を据付る見込にて目下工事施行認可の申請中なる由

(第六九号 明治三十年四月 二二六頁)

○若松電灯会社 筑前若松港の有志者の發起に係る同電灯も愈々此度設立することとなり委員上京せり

(第六九号 明治三十年四月 二二六頁)

○博多の電灯 已に工事も竣工し不日開業の筈なる同社の発電機は六十「キロワット」式台にして汽機其他一式芝浦製作所の供給に係るものなりと

(第七十号 明治三十年五月 二七〇頁)

○川上水力 佐賀県川上水力電気の調査委員は先頃佐賀郡役所に会合して協議する所ありしに同日の会にて兎に角今一度設計上の再調査を爲すことゝしたる由

(第七十号 明治三十年五月 二七二頁)

○九州通信 (五月廿八日電友報)

近來九州地方の電気事業に於ける応用は益々繁盛の有様に御座候今二三の会社に就き一覽したれば其概況を御報知すべし

三池炭礦は一言以て之れを評すれば一ヶ所に纏り居り従て電灯点火区域も左迄広からぬ様に思ひ居りたりしか中に手広く事業を擴張し実に仰天驚くの外なし

西は有明海に頻し東北は一帶連山亘延し勝立。大浦。七浦。及宮浦の諸坑等其麓にあり

目七浦発電所各坑并に工場への距離大略左の如し
但し白熱灯弧光灯数付属あり

大浦坑	三哩	白熱灯	三十五灯
勝立坑	壹哩半	同	五十灯
売物店	二哩半	白熱灯	拾二灯
宮浦坑	半哩	同	六拾灯
三池集治監	半哩余	同	百六十五灯
新聞鑛官の原坑	壹哩余	同	拾五灯
七浦坑	發電所付近	同	百二十灯
本社	壹哩半	同	七十灯
器械科工場	壹哩余	白熱灯	四十七個
建築科	同	弧光灯	二個
各社宅		白熱灯	百五十灯
浜積場	三哩余	白熱灯	四十五個
造船場		弧光灯	壹
大牟田停車場	二哩余		
三池紡績会社	一哩余	白熱灯新設共	千百灯余
三池炭礦用蒸気鉄道	延長拾八哩		
同 用馬車鉄道	長 七哩		
汽関車数	五台		
七浦発電所には三十「キロワット」二千「ヴォルト」交流発電機			
一台八拾馬力ニウヨーク安全汽機一台			
増設ノ二相交流式六拾「キロワット」二千「ヴォルト」壹台			
之れに対する蒸気器械はタンデム、コムパウンド、コンデンシング汽機百二十馬力壹台据付中			
七浦坑内へ試験用拾五馬力二相電動機連接しセントリフユウガル、			

ポンプ二台但し宍台にて八十呎の高さにて一分間の水量八拾立方呎の者を用ひ各坑内へ新設す可き灯数は白熱灯百二、三拾個余不日着する由電気ポンプ試験ノ上ハ二百二万円余を創業費として全体のポンプを変更する事なり

各工場撲炭機、送風器捲揚器械坑内ポンプへ供給用汽鐘は「ランカッシュ」形凡百五十馬力ノモノ合計七拾余個之れに要する石炭の消費は一日百余噸なり

坑内ポンプ室蒸気管坑道は非常の温度にて到底長時間の放す処に非らず又坑内の排水には数多のポンプを使用し昼夜を分たず間運転致居候此の蒸気ポンプにして電気ポンプに漸々変更致候は汽鐘も減少し従て石炭の消費も大に節減し得べし坑内ポンプ室の場所も狭少にして至極便利の者にて電線二条を地下線か又空架線にて送電すれば実に経済上第一利益ならん土地の模様依りては原働を蒸汽力に依りて電気力を応用致方利益なるべし依りて当坑に應用する電気ポンプ坑内電灯布設の見込にて電気部主任技術者村川豊三郎氏は事業取調の爲め上京中の由なり当所三井家の事業なれば随分見込あり

博多電灯会社 既に来月中旬開業せんに取忙居候同所は取付灯数二千余灯

交流発電機二千「ヴォルト」五十「キロワット」式台

汽機タンデム聯成目調機百二十馬力二台

電気付属品は悉皆東京品川電灯及芝浦製作所の供給に係れり主任技術者は月野技師なり

第二工事は近々開業の末漸々着手する見込の由

博多電灯会社には電力も應用する見込の由

博多綿紡績会社は殆んど落成電灯据付工事用付属供給品は博

多電灯会社に依頼の筈なり
三池紡績会社の電灯

同所は新築第三工場共に千余灯にて現今は東京芝浦製六百灯用エデソン式発電機宍台之れに要する汽機はウードベリー式六十馬力

宍台外に舶来製マンチエスター形発電機百三十五アムペア

ランプはスラン、ベースの様に見受たり同所電灯主任は三池炭礦

電気部の村川豊三郎氏なり

久留米紡績会社の電灯

現用発電機は品川電灯会社製エヂソン形拾号四百灯宍台汽機は石川島の製造にてアーミングトン、シムス汽機三十五馬力宍台外にシーメン式五百灯用エヂソン式百六十灯用の発電機二台使用せず
にありランプはエデソン、ベースなり

熊本電灯会社 現今の器機はエヂソン式八号二台を三線法とし外にブラッシュ式交流発電機三十「キロワット」二千「ヴォルト」宍台を使用し来りしが発電所も手狭し且つ機械も不充分なりとて此度更に東京品川電灯会社へ依頼したる五拾「キロワット」交流式発電機到着したれば発電所を他へ移し大改良を加へ居れり工事担当主任は月野工学士なり

其他八代、鹿児島電灯会社久留米電気鉄道、熊本水力電気外に若松、小倉、久留米、門司、も不達内には創立する由右は広き九州の事なれば固より尽さざる所は多けれども電気事業の一端に就き其概況を報道したるに過ぎず

(第七一号 明治三十年六月 三二一—三二四頁)

○熊本電気鉄道の認可 去る二十八年八月九日付を以て熊本市の岡崎唯雄氏外十五名より其筋に差出したる熊本電気鉄道布設の出願

書に對し主務大臣は本月十四日付を以て特許狀並に命令書を下付されたり其線路は熊本県飽託郡春日村より熊本市細工町に至りて分岐し一は唐人町、新鍛冶屋町、下通町を経、一は新町、塩屋町、先馬町を経て厩橋に出で上通町に於て合線し広町、南千反畑町、浄行寺町、小幡町、一夜塘に至る間に布設するものなりといふ

(第七一号 明治三十年六月 三二二〜三二三頁)

○久留米電灯 株式会社發起人總會は先頃久留米翠香園に開會し、設立出願其他一切の件は主唱者に一任する事、資本金は五萬圓となす事を議決したりと云ふ

(第七二号 明治三十年七月 三七四頁)

○三菱会社の電気応用 三菱合資会社の鉾山部に於ては已に電氣を使用し来りしが今般長崎の同社造船部に於ても大に電力電灯等を使用することとなり其工事一切を三吉電機工場へ請負はしたるため同工場より小田庄吉氏出張され左の機械を据付中なりと

エヂソン十号發電機

二台

右用四十馬力汽機

二台

三十五灯用ブラッシ式アーク發電機

一台

右用廿五馬力汽機

一台

ブラッシ式アークランプ

二十八個

ジャンダス式アークランプ

四個

(第七三号 明治三十年八月 四五二〜四五三頁)

○八代水力電氣会社の計画 熊本県下有志者の發起にて同県八代郡

松球摩地方の溪流を利用し八代町及附近に電力及電灯を供給するの目的を以て八代水力電氣株式会社を設立するの計画あり資本金は二十萬圓にして既に創立發起を其筋に申請せしが株金募集の方法は發起人に於て各自五十株づつを引受け其余を一般より募集する筈にて已に技師の踏査もすみたるよし

(第七三号 明治三十年八月 四五四頁)

○佐賀の水力調査 佐賀地方の有志者には電力を得んがため川上水力調査を大学教授中野初子氏に依託したるを以て氏は暑中休暇帰省旁同地方へ出向はれたるよし

(第七四号 明治三十年九月 四一三〜四一四頁)

○博多電灯会社の開業式 筑前博多の同社は十一月一日同社樓上に於て挙行し頗る盛況なりといふ

(第七六号 明治三十年十一月 六三〇頁)